

垂 範

蒔 苗 暢 夫

山田晶先生のお名前を中世哲学会との関わりで最初に見出し得るのは、『中世哲学会会報』第一号記載の、1951（昭和26）年11月3日に開催された設立準備会の出席者としてだと思います。前年11月に開催された日本哲学会大会の折、「日本における中世哲学研究者の全国的連絡組織」設立が呼びかけられ、賛同を得られた発起人の諸先生に加え、「新進研究者」の一人として挙げられています。大阪市立大学文学部講師に就任されたばかりでしたが、既に『哲學研究』に1947年から7号に亘り「聖アウグスティヌスにおける回心の問題」を発表されておられました。翌1952年5月5日の設立総会において、幹事を委嘱され、以降、委員（55-）、編集委員（65?-）、常任委員（67-）を歴任され、1979年11月委員長に選出されました。その後4期8年務められ、1987年11月自ら定められた任期に従って退任されました。このように、文字通り本学会の設立に立ち会っておられ、会の学問・研究面での充実発展の中心的役割を果たされたお一人であることは、何方もご承知の通りです。しかし、私は、第1次京都大学事務局時代（1973.12-79.11）の、先生のご研究とは少し異なった面における本学会へのご貢献について、書き遺して置きたいと思います。

先生は、創立以来21年の長きに亘って、東京大学（8年間）、上智大学（13年間）と東京に置かれていた事務局を、相当迷われたものの、これ以上東京の先生方にご迷惑をかけるわけにはいかないと、京都大学で快く引き受けることを決断されました。その際、既に職に就いておられた先輩諸先生ではなく、当時助手をしておられた山本耕平先生を筆頭に、実務に当たる我々大学院生を事務局幹事とされ、一切を任され、諸先生にはお目付け役を依頼されました。そうでなくとも、本と、カードで、歩く空間もなく、場所によっては先生の顔も見えない研究室の中の、

貴重な書架1個分を事務局用にご提供くださいました。ドアの表示は常に「多忙」でしたが、幹事連中は、遠慮しながらも、出入り自由で使わせてもらってました。さぞかしご迷惑だったことでしょう。庶務、会計、編集それぞれに複数の幹事と担当者が出て、熱い議論をしながらも、和気藹藹で仕事をこなしてました。そのメンバーはすべて山田先生を師と仰ぐ、一つの研究室の学生だったからです。事務局会議には先生もご参加くださり、i)「会員の多い大学から委員、更には常任委員が多く選ばれるのは仕方がないとしても、地方の会員の少ない大学で、立派な研究をしている先生方も大勢おられる。そういう方々にも委員になってもらいたい」、ii)「同じ人間が何時までも委員長や常任委員をしてはよくない、優秀な後継者、若手がいっぱいいるんだから、徐々に交代していかなければならない」、iii)「若い学生の研究の妨げになる事務局も、期限を切って交代すべきである」等々、学会の組織面についても、いろいろお考えになっておられることを話されました。それらを、当時委員長であられた松本正夫先生と御相談されながら、ひとつずつ改革されていきました。

まずi)については、学会発足当初から考慮されており、「5名以内に限り、委員長が推薦することができる」という諒解事項(58)も確認できますが、当時は必ずしも機能していなかったようです。しかも、5名連記であったため、特定の方々に票が集中し、その他の委員は、極僅かの票で選出されるのが実情でした。それが10名連記に改められ(76)、立会人の前で即断するという、現実には実行し難い「委員長推薦」なしに、幅広く委員が選出されるようになりました。ii)のうち、常任委員については、いろいろ辛い思いもありだったのですが、ご自分が憎まれ役を買ってでも、断行すべきとお考えになったのだと思います。発起人の先生方が高齢になられ、矍鑠としてはおられましたが、いつまでも常任委員としておられることに疑問をお感じになったのでしょう、新たに名誉会員制度を導入されました(78)。もちろん制度そのものは、直接委員辞退を迫るものではなく、「長年にわたり本会の事業遂行に寄与」され、委員を退かれた諸先生に対する感謝の顕彰としてのものでしたが、何人かの先生方にご不満だったかも知れません。もう一方の委員長については、16年間お努め下さった前任者松本正夫二代目委員長が、

「辞めたくてもなかなか辞めさせてもらえない」と悩んでおられたのを眼のあたりにして、「それはたまらん」というお気持ちも「委員長の任期は2ヵ年とし、3期を超えないものとする」と定められた(86)一因だったのではないのでしょうか。「そんな私情で提案したのではない。あくまでも学会の将来を考えてのことだ。」と叱られそうですが、何よりも研究第一の先生の、rationesの一つだったには違ひなかと推察しております。しかし、先の常任委員同様、ここで自分がやっておかなければ、今後スムーズな交代は難しくなるだろう、とのお考えをおもちであったことも確かです。iii)の事務局の任期については、1978年、事務局移転の申し出と同時に任期設定を提案され、翌79年、上智大学への移転と、「原則として4年とし、これを総会の確認事項とする。」ことが承認されました。20乃至30年前に定められたこれらの原則は、今日でも継承され、改善され、組織面における今日の発展、活性化に繋がっていると思います。

学会に対する先生のご貢献は、西洋中世哲学研究者として、初めて日本学士院会員になられたことが象徴するように、そのご研究に対する姿勢、成果であることは言うまでもありませんが、それをご紹介致すのは私の任ではありません。前年のクリスマスイブに入院されてから、およそ2ヵ月後、2008年2月29日、最愛の息子さんと二人の教え子に見守られながら静かに、ゆっくりと息を返された先生の最期を看取ってくださった主治医の言葉をご紹介して、結びの言葉とさせていただきます。

「著名な先生の最期を看取れた事を光栄に思います。医学では説明できないがんばりでした。学問、思想、信仰を生き抜かれた方からいろいろ学ばせて頂きました。ありがとうございました」。

入院中の先生は、あの凄まじいペンダコも消え、授業中であれ、学会の発表においてであれ、安易にアウグスティヌスや、トマス批判をした発表者に対する恐ろしいまでの叱正も、「またいらっしやい。私はいつもここにいますから。」もなく、特に、最後の2週間は、殆ど何も話されなかったと思います。それでも、主治医に、普通の人間ではなしえぬ何かを伝えられたのでした。

「山田先生、ありがとうございました」。